

# 顯榮祭聖体礼儀

## 単音聖歌譜



注意 譜面中、五線譜上に ||o|| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈祷文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2021年7月11日

釧路ハリストス正教会

管轄司祭ステファン内田圭一

司祭) 黙誦: 天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者

よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を

もろもろ けがれ いきぎよ しぜんしゃ われら たましい すく たま  
諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。

いと高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、至と高

きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、

主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす、)

司祭) 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世世に、



### 【 大聯禱 】

司祭) 我等安和にして主に禱らん、



司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏る心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、



司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の大主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



司祭) 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び彼等の救の爲に主に禱らん、



司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



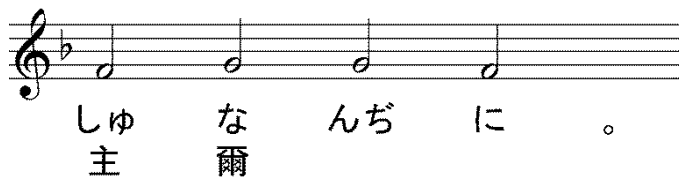
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ( 黙誦：主我が神よ、爾の權柄は像り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限

り無く、仁愛は言い難し、求む主宰よ、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此

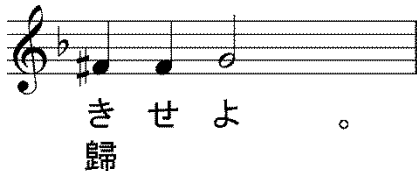
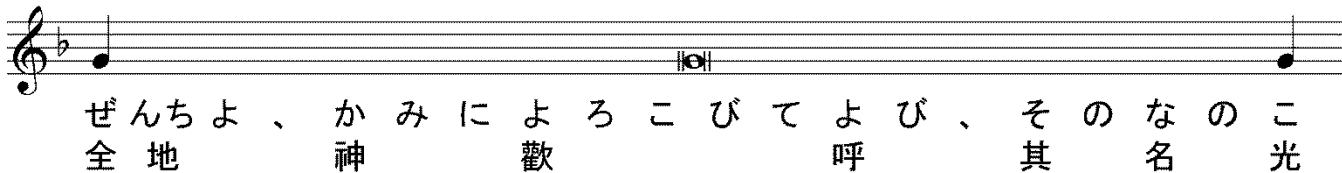
の聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豊なる恩澤と

爾の愛憐とを施し給え、 )

司祭) 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【 第一アンティフォン 】

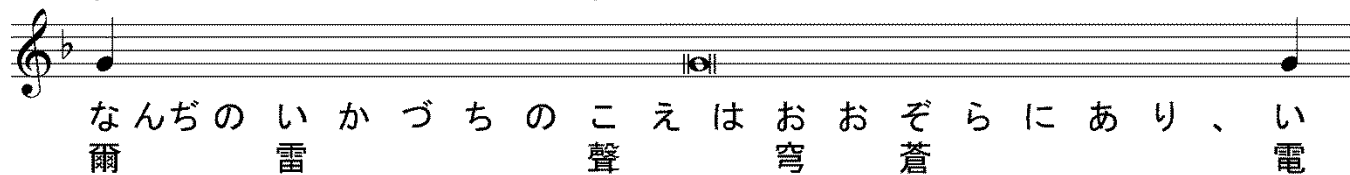




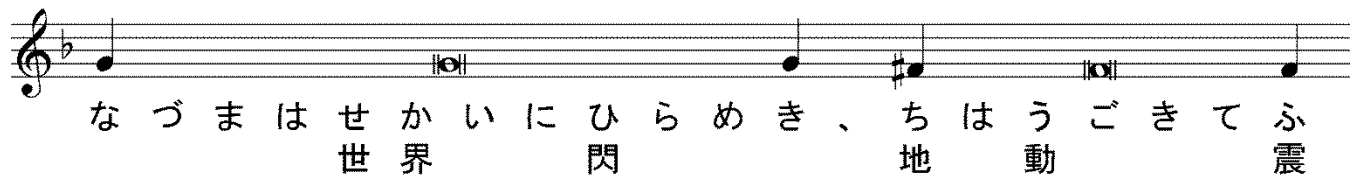
きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって  
救世主 生神女 祈祷 因



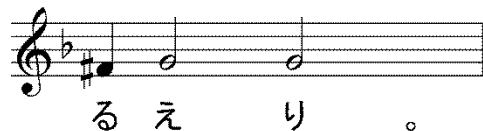
われらをすくいたまえ。  
我等 救 給



なんぢのいかづちのこえはおおぞらにあり、い  
爾 雷 聲 穹 蒼 電



なづまはせかいにひらめき、ちはうごきてふ  
なづま 世界 閃 地 動 震



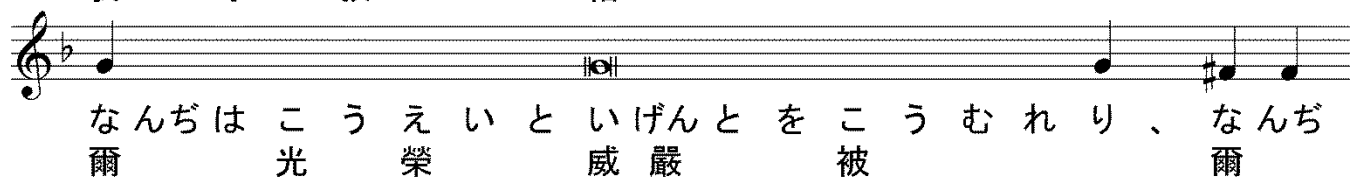
るえり。



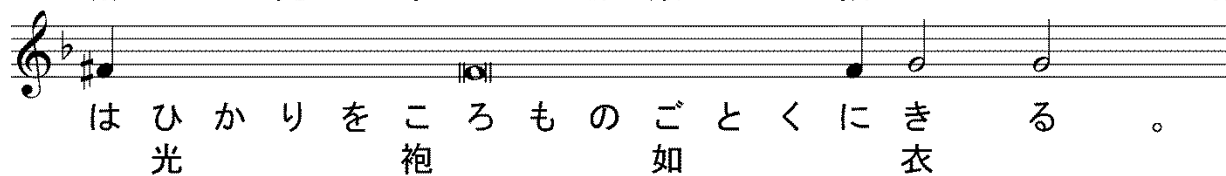
きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって  
救世主 生神女 祈祷 因



われらをすくいたまえ。  
我等 救 給



なんぢはこうえいと いげんとをこうむれり、なんぢ  
爾 光 榮 威 嚴 被 爾



はひかりをころものごとくにきる。  
光 袍 如 衣



きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって  
救世主 生神女 祈祷 因



われらをすくいたまえ。  
我等 救 給

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
何 時 世 世

き ゆ う せ い し ゆ よ 、 し ょ う し ん ぢ よ の き と う に よ っ て  
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因

わ れ ら を す く い た ま え 。  
我 等 救 給

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ <sup>しゅ いの</sup> 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちょう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>しよせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup> 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup> 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち もつ かみ いたく</sup> 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な ん ぢ に 。  
主 爾

司祭) ( 黙誦: <sup>しゅわ かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい</sup> 主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會

<sup>じゅうまん まも なんぢ どう び あい もの せい なんぢ しんせい ちから</sup> の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力

<sup>もつ かれら こうえい われらなんぢ たの もの のこ なか</sup> を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、 )

司祭) けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
 蓋 權柄 及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【 第二アンティフォン 】

シオンさんほうるわしきたかみにして、ぜんちのよ喜  
 山 美 高 處 全 地 喜  
 ろこびなり、そのほくほうにだいおうのまち邑  
 悦 其 北 方 大 王 城 邑  
 あり。

やまにおいてへんようせしかみのこよ、わ我  
 山 於 變 容 神 子 我  
 れらなんぢにアイルイヤをうとうものをすくいた給  
 等 爾 歌 者 救 給  
 まあえ。

かれらをひきてそのせいなるさかい、そのみ右  
 彼 等 引 其 聖 界 其 右  
 ぎのてのえしところのこのやまにいたれ  
 手 獲 所 此 山 至  
 り。

やまにおいてへんようせしかみのこよ、わ  
 山 於 變容 神 子 我  
 れらなんぢにアイルイヤをうとうものをすくいた給  
 等 爾 歌 者 救 給  
 ま あ え 。

そのあいするところのシオンざんをえらべり、そ  
 其 愛 所 山 擇 其  
 のせいしょをたてしことてんのごとし。  
 聖 所 建 天 如

やまにおいてへんようせしかみのこよ、わ  
 山 於 變容 神 子 我  
 れらなんぢにアイルイヤをうとうものをすくいた給  
 等 爾 歌 者 救 給  
 ま あ え 。

【 神の獨生の子 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 いつもよよに、アミン。  
 何時 世 世  
 かみのどくせいのこならびにこよ、  
 神 獨 生 子 並 言



しせざるものにしてわれらをすくわんがため  
死 者 我 等 救 爲

あまんじてせいなるしょうしんぢよ・えいていどうぢよ  
甘 聖 生 神 女 永 貞 童 女

マリアよりみをと取り、かみのせいをかえ  
身 取 神 性 易

ずしてひととなりじゅうじかにくぎうたれ、  
人 十 字 架 釘

しをもってしをふみやぶりしハリストスカみよ、  
死 以 死 踏 破 神

せいさんしゃのいつとしてちちとせいしんとと共  
聖 三 者 一 父 聖 神 共

もにさんえいせらるるのしゅよ、われらをす  
讚 榮 主 我 等 救

く いたま え。

【 小聯禱 】

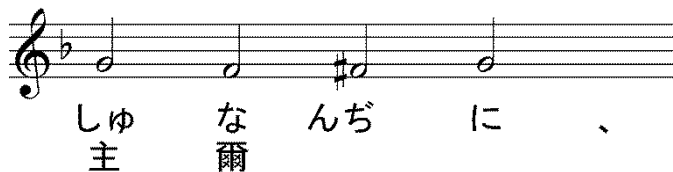
司祭) <sup>われらまたまたあんわ</sup>我等復又安和にして<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、

しゅあわれめよ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

<sup>しせいしけつ</sup>至聖至潔にして<sup>いた</sup>至りて<sup>さんび</sup>讚美たる我等の<sup>われら</sup>光榮の<sup>こうえい</sup>女宰、<sup>ぢよさい</sup>生神女、<sup>しょうしんぢよ</sup>永貞童女<sup>えいていどうぢよ</sup>マリアと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
 諸 聖 人を記憶して、我等 己の身及び互に 各の身を以て、並に 悉くの我等の  
 いのち もつ かみ いたく  
 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ( 黙誦：われら こ こうどうわごう きとう たま かつ にさんにんなんぢ な よ あつ もの  
 にも其 求むる 所を賜うを約せし主よ、爾 親ら今も爾が諸僕の願を

そのもと ところ たま やく しゆ なんぢみづか いま なんぢ しよぼく ねがい  
 其利益の爲に應わしめて、我等に今世には 爾の眞理を識り、來世には永遠の

そのりえき ため かな われら こんせ なんぢ しんり し らいせ えいえん  
 生命を得るを給え、 )

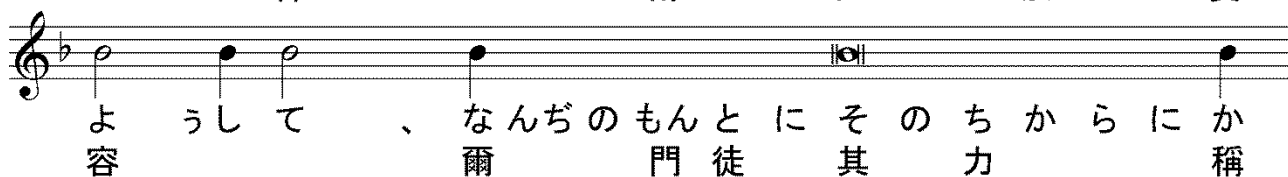
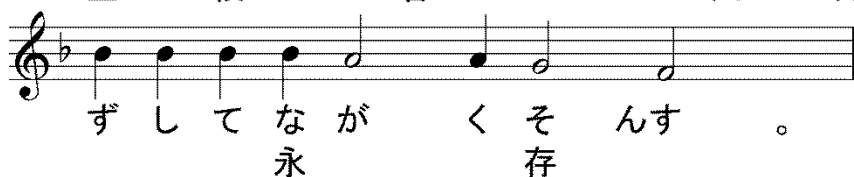
いのち え たま  
 生命を得るを給え、 )

司祭) けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま  
 蓋 爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も

いつ よよ  
 何時も世々に、



【 第三アンティフォン 】



えり。ねがわくはしょうしんぢよのきとうによ  
 願 生 神女 祈 禱 因  
 りて、われらつみなるものにもなんぢのえ  
 我 等 罪 者 爾 永  
 いざいのひかりはかがやかん。ひかりをほど  
 在 光 輝 光 施  
 こすしゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
 主 光 榮 爾 歸  
 しょざんはエルサリムをめぐり、しゅはそのたみ  
 諸 山 環 主 其 民  
 をめぐりていまよりよよ世にいたらん。  
 環 今 世 世 至  
 ハリストスカみよ、なんぢはやまにおいてへえん  
 神 爾 山 於 變  
 ようして、なんぢのもんとにそのちからにか  
 容 爾 門 徒 其 力 稱  
 ないてなんぢのこうえいをあらわしたま  
 爾 光 榮 顯 給  
 えり。ねがわくはしょうしんぢよのきとうによ  
 願 生 神女 祈 禱 因  
 りて、われらつみなるものにもなんぢのえ  
 我 等 罪 者 爾 永

い ざ い の ひ か り は か が や か ん。 ひ か り を ほ ど  
 在 光 輝 光 施

こ す し ゅ よ、 こ う え い は なん ぢ に き す。  
 主 光 榮 爾 歸

し ゅ よ、 だ れ か なん ぢ の す ま い に お る を う 得 る  
 主 執 爾 住 所 居 得

だ れ か なん ぢ の せ い ざ ん に お る を う 得 る。  
 執 爾 聖 山 居 得

ハ リ ス ト ス か み よ、 なん ぢ は や ま に お い て へ え ん  
 神 爾 山 於 變

よ う し て、 なん ぢ の も ん と に そ の ち か ら に か 稱  
 容 爾 門 徒 其 力

な い て なん ぢ の こ う え い を あ ら わ し た ま 給  
 爾 光 榮 顯 給

え り。 ね が わ く は し ゅ う し ん ぢ ょ の き と う に よ 因  
 願 生 神 女 祈 禱

り て、 わ れ ら つ み な る も の に も なん ぢ の え 永  
 我 等 罪 者 爾 永

い ざ い の ひ か り は か が や か ん。 ひ か り を ほ ど  
 在 光 輝 光 施

こ す し ゅ よ、 こ う え い は なん ぢ に き す。  
 主 光 榮 爾 歸

だれかよくしゅのやまにのぼる、だれかよ能くそのせいしょにたつ。  
 其 聖 所 立  
 ハリストスかみよ、なんぢはやまにおいてへえん  
 爾 山 於 變  
 ようして、なんぢのものとにそのちからにか稱  
 容 爾 門 徒 其 力 稱  
 ないてなんぢのこうえいをあらわしたまへり。  
 爾 光 榮 顯 給  
 ねがわくはしょうしんぢよのきとうによりて、われらつみなるものにもなんぢのえい  
 願 生 神 女 祈 禱 因  
 りて、われらつみなるものにもなんぢのえい  
 我 等 罪 者 爾 永  
 いざいのひかりはかがやかん。ひかりをほどこすしゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
 在 光 輝 光 施  
 主 光 榮 爾 歸

司祭) ( 黙誦：主宰・主・我等の神、諸天に天使及び、天使首の品級と軍隊とを立

てて爾が光榮の奉事者となしし者よ、求む我等の入るに伴いて、彼の我等

と偕に務め、共に爾の至善を讚榮する聖天使等の入るを致させ給え、蓋、

およ 今も何時も世々に、 )

司祭) <sup>えいち つつし た</sup> 睿智、 肅みて立て、

【 聖入の句 】



しゅよ、 なんぢの ひかり となんぢの しんじつ とをつか  
主 爾 光 爾 眞實 遣  
わし、 それをして われを みちびきて、  
其 我 導  
なんぢの せいざんに いたらしめたまえ。  
爾 聖 山 至 給

【 アポリティキオン 】



ハリスト スか みよ、 なんぢは やまに おいて へえん  
神 爾 山 於 變  
よ うして、 なんぢの もんとに そのちからにか  
容 爾 門徒 其 力 稱  
な いて なんぢの こうえいを あらわしたま  
爾 光 榮 顯 給  
えり。 ねがわくは しょうしんぢよの きとうによ  
願 生 神女 祈 禱 因  
りて、 われら等 つみなる ものにも なんぢの え永  
我 等 罪 者 爾 永  
いざいの ひかりは かがやかん。 ひかりを ほど  
在 光 輝 光 施  
こすしゅよ、 こうえいは なんぢに きす。  
主 光 榮 爾 歸

【コンダク】

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 す 、 い 今  
 ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
 何 時 世 世  
 ハ リ ス ト オ ス か み よ 、 な ん ぢ が や ま に お い て へ ん よ  
 神 爾 山 於 變 容  
 う せ し と き 、 な ん ぢ の も と は い る る に か な  
 時 爾 門 徒 容 稱  
 い て な ん ぢ の こ う え い を み い た り 、 こ れ な ん  
 爾 光 榮 見 此 爾  
 ぢ の じ ゅ う じ か に て い せ ら る る を み て 、 く  
 十 字 架 釘 見 て 苦  
 る し み の じ ゅ う な る を さ と り 、 な ん ぢ が じ  
 自 由 悟 爾 實  
 つ に ち ち の こ う え い な る を せ か い に つ た え ん  
 父 光 榮 世 界 傳  
 た め な り 。  
 爲

司祭) ( 黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有  
 となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を  
 かざねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくい  
 飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲

つうかい た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ  
 に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる 爾 の諸 僕を、此の時に於ても、爾  
 せい さいだん こうえい まえ た なんぢ どうぜん ふくはいさんえい たてまつ た  
 が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾 に當然の伏拝讚榮を 奉 るに堪  
 もの しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う  
 うる者となしし主宰よ、 爾 親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、  
 なんぢ じんじ もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ  
 爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が  
 たましい からだ せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え  
 靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ  
 たま せい しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ  
 給え、聖なる生神女と古世より 爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依り  
 てなり、 )

けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ  
 司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、我等光榮を 爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
 常 生 者 我 等 憐  
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖  
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
 常 生 者 我 等 憐  
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖 神 聖 勇 毅



せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
 光 榮 父 子 聖 神  
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 歸 今 何 時 世 世  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖 神 聖 勇  
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 毅 聖 常 生 者 我 等  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦: 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 提綱 (プロキメン) 第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作り、

しゅ よ 、 なんぢの しわざは なんぞお お き 、  
 主 爾 工業 何 大  
 み な ち え を も っ て つ く れ り 。  
 皆 智 慧 以 作

誦經) 我が<sup>わ たましい</sup>靈よ、主を<sup>しゅ ほ あ</sup>讃め揚げよ、主我が<sup>しゅわ かみ</sup>神よ、爾は<sup>なんぢ いた</sup>至りて<sup>おおい</sup>大なり、

しゅ よ 、 なんぢの しわざは なんぞお お き 、  
 主 爾 工業 何 大  
 み な ち え を も っ て つ く れ り 。  
 皆 智 慧 以 作

誦經) 主よ、<sup>しゅ なんぢ</sup>爾の<sup>しわざ なん</sup>工業は何ぞ<sup>おお</sup>多き、

み な ち え を も っ て つ く れ り 。  
 皆 智 慧 以 作

【 使徒經 (アポストロス) 聖使徒ペトルの後公書1章11~19節 】

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup>聖使徒ペトルの<sup>こうこうしょ よみ</sup>後公書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup>謹みて<sup>き</sup>聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup>兄弟よ、<sup>ますますべんれい</sup>益 勉勵して、<sup>なんぢら め</sup>爾等の召されし<sup>こと およ へら</sup>事、及び<sup>こと けんご</sup>選ばれし事を<sup>これら</sup>堅固にせよ、此等

<sup>おこな</sup>を行いて、<sup>なが つまづ</sup>永く躓かざらん。蓋 <sup>けだしか</sup>此くの若くば、<sup>ごと</sup>爾等に<sup>なんぢら われら</sup>我等の主 <sup>しゅきゅうしゅ</sup>救主イイススハ

<sup>えいえん</sup>リストスの<sup>くに い</sup>永遠の國に入る<sup>おんけい</sup>恩恵は <sup>ゆたか くわ</sup>裕に加えられん。故に <sup>ゆえ</sup>爾等此を<sup>なんぢらこれ</sup>知り、<sup>し</sup>且 <sup>かつす</sup>既に<sup>う</sup>受け

<sup>しんじつ</sup>たる<sup>かた</sup>眞實に<sup>われ</sup>堅められたれども、<sup>つね</sup>我は恒に <sup>なんぢら</sup>爾等に<sup>これら</sup>此等の事<sup>こと</sup>を<sup>きねん</sup>記念せしむるを<sup>や</sup>息めざらん。

<sup>われ</sup>我は<sup>こ</sup>此の<sup>まく</sup>幕に<sup>あ</sup>在る<sup>とき</sup>時、<sup>こ</sup>此の<sup>きねん</sup>記念を<sup>もつ</sup>以て <sup>なんぢら</sup>爾等を<sup>はげ</sup>勵ますは、<sup>とうぜん</sup>當然の事なりと思えり、蓋

<sup>われ</sup>我は<sup>わ</sup>我が<sup>まく</sup>幕を<sup>だつ</sup>脱せん<sup>ちか</sup>ことの<sup>し</sup>近きを知る、<sup>わ</sup>我が<sup>しゅ</sup>主イイススハリストスの<sup>われ</sup>我に<sup>しめ</sup>示ししが<sup>ごと</sup>如し。

しか われ わ さ のち なんぢら つね これら きねん つと けだしわれら  
然れども我は我が去らん後にも爾等の常に此等を記念することを勉めん。蓋我等は、

たくみ きよせつ したが なんぢら わ しゅ のうりよく こうりん つ  
巧なる虚説に従いて、爾等に我が主イイススハリストスの能力と降臨とを告げし

あら すなわちそのいこう した みもの しか けだししだい こうえい こえ かれ  
に非ず、乃其威光を親しく見たる者として然せり。蓋至大なる光榮より聲の彼に

きた これ われ しあい こ わ よろこもの い とき かれ かみちち そんき こうえい  
來りて、此は私の至愛の子、我が喜べる者なりと曰いし時、彼は神父より尊貴と光榮

う てん きた こ こえ われらかれ とも せい やま あ とき これ き  
とを受けたり。天より來りし此の聲は、我等彼と偕に聖なる山に在る時、之を聞けり。

かつわれら さら たしか よげんしゃ ことば なんぢら これ くら ところ かがや ともしび  
且我等に更に確なる預言者の言あり、爾等が之を暗き處に耀く燈として、

てんあ あさのほし なんぢら こころ い いた かえり よ  
天明け、晨星の爾等の心に出づるに至るまで顧みるは善し。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしてください。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである。それだから、あなたがたは既にこれらのことを知っており、また、いま持っている真理に堅く立っているが、わたしは、これらのことをいつも、あなたがたに思い起させたいのである。わたしがこの幕屋にいる間、あなたがたに思い起させて、奮い立たせることが適当と思う。それは、わたしたちの主イエス・キリストもわたしに示して下さったように、わたしのこの幕屋を脱ぎ去る時が間近であることを知っているからである。わたしが世を去った後にも、これらのことを、あなたがたにいつも思い出させるように努めよう。わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。イエスは父なる神からほまれと栄光とお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである。こうして、預言の言葉は、わたしたちにいつそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい。

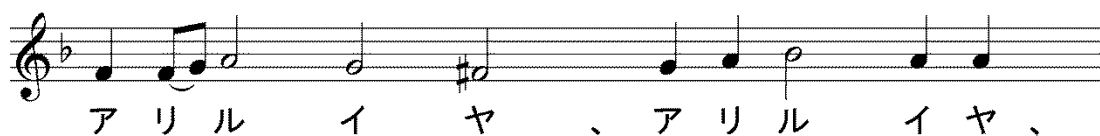
\*\*\*\*\*

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

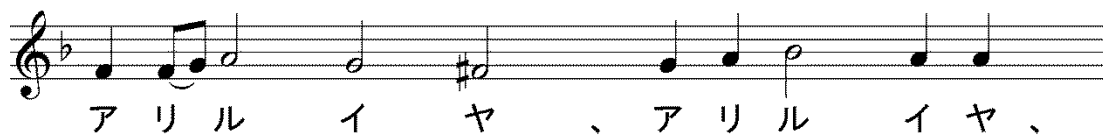
【 アリルイヤ 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

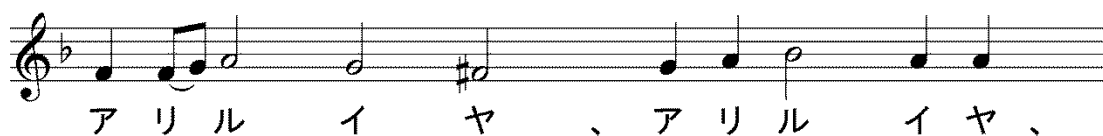




誦經) <sup>てん なんぢ ぞく ち なんぢ ぞく</sup> 天は 爾 に屬し、地も 爾 に屬す、



誦經) <sup>ラッパ よびごえ し たみ さいわい</sup> 角 の呼 聲を識る民は 福 なり、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いぎぎよ ひかり かがや わ</sup> 人を愛する主宰よ、我が 心 に神を知る智慧の 浄 き光 を輝 かし、我が

<sup>しねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく</sup> 思念の目を啓きて、 爾 が福音の 教 を悟らしめ給え、我が衷に 爾 の福たる

<sup>いましめ おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ</sup> 誠 を畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ 爾 の

<sup>よろこ ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし</sup> 喜ぶ 所 を思い且つ 行 いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、 蓋 ハリ

<sup>かみ なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち</sup> ストス神よ、 爾 は我が 靈 と體 との光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父

<sup>しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> と至聖至善にして生命を 施 す 爾 の神とに光 榮 を獻ず、今も何時も 世 世に、ア

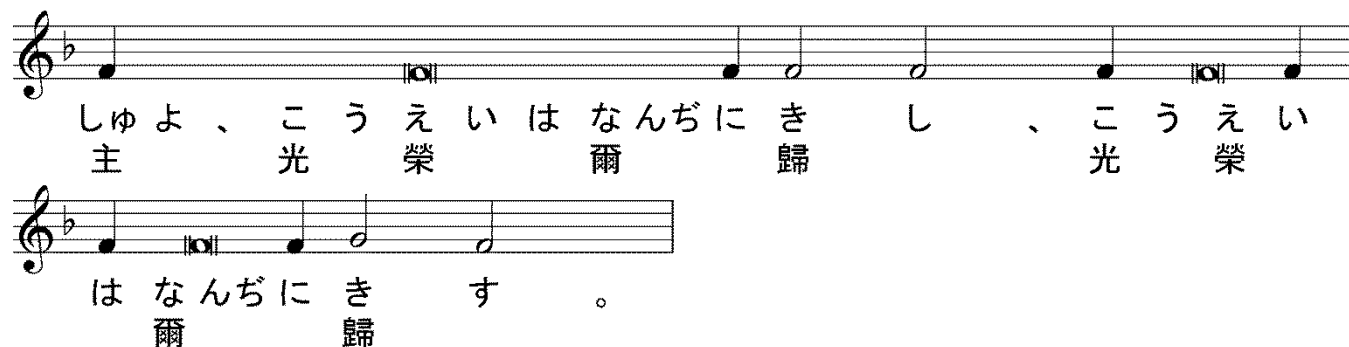
ミン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書17章1~9節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、 肅 みて立て 聖 福 音 經 を聴くべし、衆 人 に平安、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 彼の時、イイススはペトル、イアコフ、イオアンを携え、獨彼等を率いて、高き山に

のぼり、かれらまえかたちかそのおもてひごとかがやそのころもひかりごとしる

くなれり。視よ、モイセイ及びイリヤ現れて、彼と與に語れり。時にペトル イイススに

い謂えり、主よ、我等此に居るは善し、爾若し欲せば、我等此に三の廬を建てて、一

は爾の爲、一はモイセイの爲、一はイリヤの爲にせん。彼が尚言う時、視よ、光れ

る雲は彼等を蓋い、且雲より聲ありて云う、此は我の至愛の子、我が喜べる者なり、

かれきもんときふふくおそはなはだつかれらふい

起きよ、懼るる勿れ。彼等其目を擧げて、獨イイススの外に誰をも見ざりき。山を下る

とき、イイスス彼等に戒めて曰えり、人の子が未だ死より復活せざる先には、見たる事を

ひとつなか  
人に告ぐる勿れ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスはペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、その顔は日のように輝き、その衣は光のように白くなった。すると、見よ、モーセとエリヤが彼らに現れて、イエスと語り合っていた。ペテロはイエスにむかって言った、「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。もし、おさしつかえなければ、わたしはここに小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。彼がまだ話し終えないうちに、たちまち、輝く雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」。弟子たちはこれを聞いて非常に恐れ、顔を地に伏せた。イエスは近づいてきて、手を彼らにおいて言われた、「起きなさい、恐れることはない」。彼らが目をあげると、イエスのほかには、だれも見えなかった。

一同が山を下って来るとき、イエスは「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」と、彼らに命じられた。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ